

研究ノート 本研究は複数の匿名レフェリーによる審査を受けたものです(日本地域政策学会 2023年3月)

コロナ禍の休業の判断にみる高齢者の居場所作りに大切なこと —伊豆松崎であい村蔵らを事例に—

The Important Things to Sustain an “Ibasyo” for the Older Adults During COVID-19 Pandemic:

The Case Study of the “Kurara”, a Social Place in “Izu Matsuzaki”

中込 光穂(静岡大学大学院総合科学技術研究科)

Mitsuho NAKAGOMI (Shizuoka University Graduate School of Integrated Science and Technology)

松本 和浩(静岡大学)

Kazuhiro MATSUMOTO (Shizuoka University)

(受付日: 2022年6月29日 受理日: 2022年11月29日)

Abstract

Kurara is a “Ibasyo (the comfortable place)” for older adults. We conducted participants observation, face-to-face interviews, and questionnaires to reveal why this place could survive the period of COVID-19 pandemic. Kurara has been run as a worker’s collective and the land and the building belong to older adults who work there. Thus, they need not care about the rental fee and the labor cost during the closing duration. Moreover, the leaders of Kurara have been endeavoring to engage in 3 things 1) to establish an easily understandable goal for all related persons, 2) to conduct some personalized approaches to care for everyone, 3) to prepare for the future by using existing resources, which makes Kurara a “Ibasyo” for the participants psychologically. The system of worker’s collective and the leader’s appropriate care for all workers are essential to maintain the “Ibasyo” for older adults during the COVID-19 pandemic.

Keywords: community, social care, social welfare, wellbeing, workers collective

1. はじめに

他者との関わりが希薄になりつつある現代、「居場所」を持つ重要性が高まっている。居場所について中島ほか(2007)は、「他者から認められたり、他者から自由になって自分を取り戻したりして得られるような『自分を確認できる場所』」であると定義している。学校や職場、家庭など居場所になりうる場は多々あるがその全てが居場所になるわけではない。例えば、不登校児童や帰宅拒否児童はそれぞれ学校や家庭という場を有しているが、それらが居場所とはなり得ない。つまり、居場所には建造物や部屋という物理的な空間だけではなく、①「落ち着く・ほっとするといった安心感」、②「受け入れられているといった被受容感」、③「役に立っている・必要とされているといった役割感や自己有用感」、④「ありのままの自分でいられるといった本来感」といった心

理的充足感も必要不可欠なのである(西中2014)。

高齢者の居場所に関する研究は、介護施設などの社会的に与えられた場を対象としたものと(中村2018)、主として定年以降、介護が必要となるまでの期間に職場などとは別の場所に居場所を求める過程とそこでの活動を対象にしたもの(尾澤・藤井2021)と大きく2つに分けることができる。我が国の平均寿命は2020年現在84.7歳と世界最高水準にあり(厚生労働省2021a)、退職から介護が必要となるまでのいわゆるアクティブシニアの期間が年々増加している。以前は多世代が同居する家庭が多かったことから、孫の面倒を見るなど家庭内に居場所を見つけることもできた。しかし、近年は共働きや核家族の家庭が増加し、退職後の家庭内に活躍の場を失った高齢者も多い。そのような人々の受け皿として、社会の中に高齢者が活躍できる居場所を作る重要性は

年々高まっている（厚生労働省 2019）。

一方、2019年に発生したコロナ禍をうけて、居場所作りの活動は岐路を迎えた。感染拡大を懸念し、飲食店や各種教室などの高齢者の居場所の多くが閉鎖を余儀なくされたのである。本研究で取り上げる「伊豆・松崎・であい村 蔵ら」（以下、蔵ら）も同様に閉鎖を余儀なくされたが、このような環境下でも高齢者の居場所として機能し続けた。

本研究では、蔵らの活動を主導する立場の人々がコロナ禍においても継続強いては補強した活動を、コロナ禍以前から続けている参与観察および活動参加者へのヒアリングやアンケートを通して明らかにし、コロナ禍による活動の「場」の閉鎖があったからこそ顕在化した、高齢者の居場所作りに大切な「場」以外の要因を明らかにする。

2. 研究方法

本研究は、2019年1月～2022年4月まで、筆者らが蔵らを定期訪問し、活動参加することで行った。公開されている報告書やインタビュー記事、静岡県や松崎町の広報記事等を参考にするとともに、蔵らの出資者である活動メンバーへ以下の調査を行った。調査および写真撮影はいずれも対象者に本調査の趣旨を説明した上で行い、個人情報等に係る情報については公開の許可を得たもののみを掲載した。

2.1 アンケート調査

2021年9月にサポートスタッフ20名に対して蔵ら代表を通じて無記名のアンケート票を各戸配布し、15名から回答を得た。質問内容は、性別、年齢層、参加理由、参加後の生活変化、楽しいと感じる活動、休業中のメンバー間の接触頻度とその手法、コロナ禍での活動の工夫等で回収も代表が行った。

2.2 ヒアリング調査

2021年9月に閉店中の蔵ら店舗で、代表理事の青森千枝美氏（以下、青森さん）とコアメンバー4名に対し対面で行った（図1）。質問内容は、蔵らの活動理念、地域に対する思い、活動へ参加後の自身の変化、閉鎖中の活動と心境、メンバー間の関わり、コロナ禍後の展望等である。



図1 店舗でのヒアリング調査の様子

出所) 筆者撮影

3. 結果

3.1 「であい村 蔵ら」の活動概要

蔵らの所在地である静岡県松崎町は人口6,061人（2022年）の静岡県内で最も人口の少ない町である。65歳以上の人口の割合を示す高齢化率は49.5%（静岡県2022）で、全国平均の28.8%（厚生労働省2021b）を大きく上回る。養蚕業で栄えた街の面影は、なまこ壁に代表される豪華な意匠に彩られた古民家や蔵に残されているが、通りを歩く人影もまばらで活気は失われている。

そのような中、高齢者自身が元気で活動しつつ地域の活性化にも貢献したいと立ち上がったのが、地元高齢女性のみで構成された「蔵ら」のメンバーである（表1）。「蔵ら」は手作りの押し寿司や地元野菜の天ぷら等のランチを提供する食事処と、手作りの人形やバッグといった雑貨を販売するギャラリーの2つが複合的に運営される小さな店舗である。木曜を除く毎日、来訪する観光客に松崎の見どころを

表1 であい村蔵らの基本情報

場所	静岡県賀茂郡松崎町松崎 319-1
目的	● 町おこしの一端を担う ● 高齢者が生きがいを持ち働ける場作り ● 世代を問わず一人でも気軽にいれる居場所作り
営業日時	木曜日定休 10時～16時
設立年	2010年
構成	代表理事 青森千枝美氏（87歳） コアメンバー 5人 サポートスタッフ 23人

出所) 筆者作成

紹介したり、ぶらりと立ち寄る近所の高齢者のとりとめの話に耳を傾けたりと、蔵らのスタッフは本当に忙しい。人形作りのワークショップや布の即売会を開催することもあり、地域住民が気軽に訪れ、楽しめる雰囲気作りを行っている。「私もまだまだこれからが頑張り時！」とスタッフの接客は笑顔で元氣いっぱいであることから、来訪者は皆「蔵らに来ると元氣になる！」と前向きな気持ちにさせられる。

3.2 構造

蔵らの活動メンバーは4つの階層からなる。第1はスタッフを取りまとめる代表理事の青森さん。第2は主に店舗での接客、販売、調理など活動の中心を担うメンバー5名（以下、コアメンバー）。第3は販売用の雑貨を各々の自宅で制作するメンバー23名（以下、サポートスタッフ）。これに第4の層として蔵らの来訪者が加わる。来訪者は、厳密には地域外から訪れる観光客と地元に住む主に高齢の利用者との2種に分けられるが、本論では区別しない。

店舗で活動する青森さんとコアメンバーは、日ごとの利益をメンバーの勤務時間に応じて分配している。そのため時給は毎日異なり、ほとんどが最低賃金以下である。一方サポートスタッフは、雑貨の売価を自ら決め、売上の2割を販売手数料として蔵らに納める。青森さん、コアメンバー、サポートスタッフのいずれもが蔵らへの出資者であることから、店舗は共同の持ち物・資源である。そのため、各自が「活動の場を支えている」という意識を持ちつつ、蔵らの活動や運営について、上下の立場を作ることなく話し合っている。つまり、蔵らは労働者が自ら出資し、経営権を持ち、事業主という対等な立場で働く協同組合形式の団体（河西 2010）と定義されるワーカーズコレクティブとして活動を行っている。

3.3 誕生の背景

背後になまこ壁を有する2階建ての蔵を有し、街道に面した表側に旧自転車屋としての土間の店舗を持つ現在の「蔵ら」の活動の場が誕生したのは2010年のことである（図2）。しかし、先駆けとなる活動はそれ以前から行われていた。蔵らの発足の契機をつくったのは青森さんである。2005年よりボランテ



図2 なまこ壁の蔵を背後に有する蔵らの店舗
出所）筆者撮影

ィアで「もの作り介護」を実践し、地元高齢者たちと手芸品の制作や販売を行う工房を運営していた（静岡県 2015）。各自が仕事を通じて得たスキルを活かして雑貨を製作するとともに、もの作りのワークショップも開いていた。そのような活動を行っていた2010年2月、築150年の現店舗が売りに出され、買い手がない場合は取り壊されることを知ったのである。以前からここで体験教室を開催していた青森さんは、持ち主の「何とか残してほしい」という思いを酌んで町に買取を働きかけるものの、様々な制約から買取が難しいことが明らかになる。一般の買い手もなかなか決まらない中で、「ここで体験教室を続けられたら」という青森さんの思いと、「この場所から松崎を元気にできたら」という仲間たちの思いがともに高まり、25名の出資者とともに店舗となる古民家を購入し、この場所で新たな活動を始めることを決めた。ワーカーズコレクティブとしての働き方を推奨しているため、出資者は原則、何らかの活動に参加するが、中には年に一度の総会の報告のみを楽しみにしている人もいる。活動は、雑貨の作成・販売を継続するとともに、新たに地域の高齢者が一食でもいいから誰かと顔を合わせて食事ができる環境を整えるため、食事処を準備することにした。青森さんはメンバーに「一番の得意料理を作ってきて！」と呼びかけ、多種多様な家庭料理が集まる中から「あなたは天ぷらの名人ね」、「煮物はあなたに任せれば間違いなしね」と自然におふくろの味のランチメニューと調理担当者が決まったという。

活動当初地元客が中心であった来訪者も、メデイ

ア露出の増加とともに観光客が増加し、「このおかげで懐かしい!」、「帯で作られたバック素敵だね」等々客の絶えない人気店になっていった。このような来訪者の喜びの声が、青森さんやコアメンバーたちに「自分が必要とされている」という満足感や有用感をもたらし、蔵らを「居場所」としてなくてはならない活動の場としているものと考えられた。

3.4 居場所としての必須要件に対する考えの変化

「蔵らが営業を継続し、多くの来訪者があり、コアメンバーが直接対話をする」あるいは「多くの来訪者があり、自分の作ったものを購入してもらえ」ということが、蔵らが居場所として機能するうえで最も重要なことであるとコロナ禍発生以前の筆者らは考えていた。つまり、「居場所」を形成する際には、「店舗」という「物理的な場所」が必要不可欠であるとしていた。しかし、コロナ禍が発生した2019年、蔵らはいち早く店を閉めるという決断をしたにもかかわらず、活動に参加する地域高齢者の居場所であり続けた。つまり、蔵らという「物理的な場」は、活動する人々の居場所として機能するうえでの必須の条件ではなかったわけである。以下の章では、蔵らの「何が」居場所としての機能を維持するうえで不可欠であったのかについて考察する。

4. コロナ禍においても蔵らが居場所たりえた要因

4.1 ワーカーズコレクティブ方式による運営

コロナ禍が発生し、飲食店に対する行政の正式な休業要請に先立つ2019年12月、蔵らはいち早く自ら休業を決めた。このような素早い意思決定が行えた背景には、蔵らがワーカーズコレクティブ方式の運営体制を取っていたことがある。蔵らで働く高齢者は「高齢者が生きがいを持って元気に暮らせる地元、松崎を作ろう」という設立理念のもとに出資金を出し合って活動に参加している。出資者は活動内容に関わらず、いずれもが雇われた労働者ではなく共同経営者の一人で、平等な一票を持ち蔵らの経営方針を決定する権利を有している。そのため、「地域外の観光客等も受け入れている状況で自らがコロナウイルスに感染したり、感染を拡大させたりする不

安を抱えたままでは、設立理念のもと元気に活動することはできない。」との思いを共有し、迅速に「閉鎖」の判断を下せたものと考えられる。

さらに、出資金で活動の場となる蔵らの土地および店舗を購入し、自らの手で管理・運営していたことも大きい。行政の休業要請に対して多くの飲食店は協力したいと考えていたものと推察される。しかし賃貸物件の場合、月々のランニングコストに占めるテナント料の割合が大きく、補助金などの十分な手当てがない中では営業を続けざるを得ない状況に追い込まれていた(坂本2021)。つまり、蔵らが休業を迅速に決断できたのは、自前の土地と店舗を有し、テナント料から成る大きな出費の補償を考慮する必要がなかったことも大きいものと考えられた。

4.2 年金による最低限の収入の確保

ワーカーズコレクティブ方式の運営体制は、テナント料と並んで月々の大きなランニングコストとなる人件費の面からも「場の維持」に大きな役割を果たした。蔵らにおける店舗の利益は、働いたすべての人で平等に分配する方式を取っている。そのため、店舗を閉鎖し、売り上げが無くなれば当然、各メンバーが得られる収入もゼロになる。ただし、このようなシステムを取っていることから「閉鎖中にかかる人件費」もゼロであり、休業が長引いたとしても、蔵ら自体の支出が積み重なり、経営が立ち行かなくなる心配はない。通常、労働者が収入を得られなくなれば生活自体が立ち行かなくなる。しかし、蔵らの活動メンバーは皆60歳以上であり年金を受給している。そのため、蔵らの活動による収入が無くなっても生活に必要な最低限度の収入は得られている。平常時も多くのスタッフが蔵らで得られる収入を副収入としてとらえ、孫との交流に使うなど、自らの生活を豊かにするために使っていた。年金があるからこそ居場所作りの活動が続けられるという事例は、静岡県島田市の無人駅舎を用いた食事処と生きがい活動を組み合わせた活動「サヨばあちゃんの休憩所」でも見られた(伊藤・松本2021)。このように、蔵らの活動で生計を立てているメンバーがいなかったことも休業の素早い決断につながり、「場の維持」に大

きな役割を果たした。

4.3 青森さんの気遣い・配慮

ワーカーズコレクティブの経営方式による賃料、人件費のかからない運営が、コロナ禍においても蔵らという居場所の「場の維持」に大きな役割を果たしたことは確かである。しかし、蔵らが店舗閉鎖以降もコロナ禍以前から集っていた人々の「心理的居場所」であり続けられた背景には、青森さんの気遣い、配慮の継続と補強があった。以下ではコロナ禍で顕在化したそれらを3つに大別してみていく。

第一は、すべての活動メンバーが共有可能なわかりやすい目標を設定することである。「コロナ禍が収束したら我慢してもらったお客さんと呼んで小さなバザールをやろう!」。店舗の閉鎖から数カ月が経った2020年の夏、青森さんは閉鎖直後の動揺を治め、様々な立場で蔵らと繋がる人々が、それぞれ未来に希望が持てるような大きな目標を立て、沈みかけていた心を奮い立たせていた。コアメンバーには、再開後の来訪者にさらに喜んでもらえるように営業中は難しかった店舗のリフォームを呼びかけ、共に実行していた。サポートスタッフには「バザールでは豊富な品物でお客さんに喜んでもらおう!」と雑貨をなるべくたくさん作ってほしいと呼びかけた。また、再開を楽しみに問い合わせをしてくる町内外の客にも、「バザールをするから楽しみに待っていてください。」と前向きなメッセージを送り続けた。このように、休業によりスタッフ、来訪者共に物理的に集まる場所が無くなって以降も、蔵らが皆の心の中

にあり続けられるような配慮が行われていた。

しかし、遡って考えてみると、このような配慮は青森さんがコロナ禍以前より行ってきたことなのである。青森さんは、事あるごとにコアメンバーやサポートスタッフに「いつも4つの『チャ』を心の隅っこにね!」と、高齢者のスタッフが忘れがちな①チャンスを生かす心、②チャレンジする精神、③チャレンジする勇氣、④いつも笑顔を絶やさないチャーミングさ、4つの「チャ」を共通の目標にして活動することを意識づけていた(図3)。何気なく見ていたこれらの事柄は、実は活動に参加する様々な背景を持つ人々の心を一つにし、同じゴールを目指せるようにする工夫だったのである。

二点目は、蔵らの全ての活動メンバーにきめ細かい声掛けおよびフィードバックを行うことである。閉鎖中、店舗では青森さんと数名のコアメンバーが静かに片付けや裁縫を行っていた。しかし、気になって覗きに近所の常連客や郵便配達員にまで、「コロナ終息後に向けて今も準備を進めていますよ、お互いに変な時だけど頑張りましょうね」と励ましの言葉をかけ続けていた。また、各家庭で地道に雑貨作りを続けるサポートメンバーに対しては、特段用事がないのにもかかわらず、コアメンバーと手分けして「元気にやってるかしら?」と電話で声かけを行い、日々の生活に対しての心配りを怠らなかった。実際に「休業中のスタッフ同士の交流頻度と手段」に対するアンケート結果を見ると、「1ヶ月1回以上」と回答した人が87%に上り、その手段も長時間一緒に活動する事こそできないものの、届け物をする、電話をする、メールをするなど多岐にわたっていた(表2)。

思い返してみると、青森さんたちはコロナ禍以前から、来訪者に対しても、「次の春はあそこの山で育てている葉でね、桜餅をやりますからね。」と聞かれてはいないけれど、言えばその人が喜んでくれるような言葉をかけてコミュニケーションを図ったり、サポートスタッフの作った品物が売れるたびに「今日、あなたの作った青いカバン、旦那さん用につけて言って女性が買って行かれたわよ」と報告を欠かさ



図3 メンバーと目標を共有する青森さん
出所) 筆者撮影

なかったり、意識的に気持ちを繋ぐ様々な工夫を行っていた。このような平常時からの言葉の積み重ねが、信頼感の醸成に繋がり、対面でゆっくり話すことができない非常時においても、人々の心を繋ぎ、蔵らを「心のよりどころ」たらしめていた。

三点目は、叶わない理想を追うのではなく、今の環境でできる最高の事を楽しくやり、将来に向けての一步を確実に踏み出すことである。コロナ禍で一般の人々が「これまで通りの生活」ができないことへの不安で右往左往する中でも、蔵らに大きな混乱は起こらなかった。いち早く店舗の閉鎖を決定するとともに、休業直後からサポートスタッフを含む関係者全員で布マスクの作成を始め、地元の福祉施設など、マスクが入手できずに困っていた人々に無償で提供し始めた。このように、外部環境の変化に翻弄されるのではなく、主体的に活動を変化させることで、「私たちにもやれることがある。」という自己肯定感を維持し、皆がこれまでと変わらず、将来に向けて前向きに生活しているように感じられた。実際、アンケートで「コロナ禍における活動」を問うたところ、自宅で雑貨を作りたい、今まで多忙で出来なかった家の片付けをする、本を読み新たな作品のアイデアを見つける、など、将来に向けての前向きな回答が多く（表2）、一般的には樂觀できない状況を、それぞれが今できることに集中することにより「楽しんで」いるようにも受け止められた。

そのような視点でコロナ禍以前の活動を振り返ってみると、サポートメンバーが作ってきた雑貨が売れないような深刻な状況でも、それを否定することなく、少しでも販売を伸ばすために「次のカバンはもうちょっと明るい色の布を使ったらどうかしら？」や「今度は私が布を用意するから、〇〇さんの技術でこんな雑貨を作ってきて！」など改善への提案を怠らなかった。食事処でも、メディアに取り上げられた直後は客が殺到し、ゆっくりと会話が楽しめなかったり、ギャラリーの雑貨を見学できなかったりといった危機的状況が生じた。しかし、青森さんは直ちにコアメンバーの労をねぎらうと同時に、「やっぱりお客さんにはゆっくり会話を楽しんでもらっ

表2 サポートスタッフへのアンケート結果

Q 参加を決めた理由は？（複数回答可）			
特技を生かしたい	67%	人と関わりたい	40%
人の役に立ちたい	60%	健康でいたい	33%
町を元気にしたい	53%	収入を得たい	33%
Q 参加によってQOLは向上したか？			
はい	100%	いいえ	0%
Q QOLの何が向上したか？（複数回答可）			
人と話す機会が多くなった	73%	目標ができた	47%
楽しい時間が増えた	73%	できることが増えた	40%
元気になった	67%	自分の得意を知れた	40%
Q 楽しいと感じることは？（複数回答可）			
作品を作る	67%	メンバーと集まる	47%
客と話す	60%	スタッフと話す	40%
自分の特技を生かす	47%	新たなことを学ぶ	40%
Q 休業中のスタッフ同士の交流頻度は？			
半年に一度程度	7%	1ヶ月に一度程度	7%
1ヶ月に一度以上	87%		
Q その手段は？（複数回答可）			
直接会う	100%	電話をする	33%
届け物をする	53%	メールをする	7%
Q コロナ禍の活動で工夫していることは？			
雑貨を作りたい	62%	休息をとる	23%
新たなアイデアを見つける	8%	片づけをする	8%

出所）筆者作成

て、ギャラリーも見てもらいたいよね。」と収入が減るのも厭わずランチの提供数を限定し、スタッフがランチの提供のみに忙殺されないように心の余裕を生み出す配慮をしていた。このように、現状をまず楽しみ、冷静に受け入れ、その中で、将来に向けてできる最善の事を楽しみながら行うということは、以前から一貫して行われていたのである。

コロナ禍により図らずも顕在化した、青森さんが以前から行ってきた蔵らという「場」を万人の居場所たらしめる3つの工夫、①関わる人みんなが共有可能なわかりやすい共通の目標を設定すること、②全ての人々にきめ細かい声掛けを行うこと、③今の環境でできる最高の事を楽しくやり、将来に向け準備をすることは、「場」が一時的になくなったとしてもそこに集う人々が「私がここに居続けたい」と感じるために欠かせない安心感、充足感を与えていたのである。つまり、居場所作りにおいては、このような「心理的な居場所」作りへの継続的な配慮も必要不可欠であるものと考えられる。

5. ワーカーズコレクティブにふさわしいリーダーが生まれた背景

共に活動するメンバーと同じ立場に立ちながらも、自然と周囲の人々を巻き込み、リーダーシップを取っていく青森さんは、ワーカーズコレクティブの運営方式に則り運営される蔵らに欠かせない。アンケート、ヒアリング両調査からも、他のメンバーの青森さんに対する信頼がくみ取れる。青森さんがこのようなリーダーになりえた背景を生い立ちから探してみると、幼少期～蔵らで活動を始めるまで、「他人の思いに寄り添う」様々な教育や経験を積み重ねてきたことが明らかになった。

青森さんは1935年、5人兄妹の長女として大阪で生まれ、6歳の時に戦火を逃れるために父方の実家のある松崎町に疎開した。母親は決してでしゃばらない人で、自身が気づいた生活や人付き合いの「肝」を幼い青森さんに「瑠璃も玻璃も照らせば光る」などの格言とともに教えてくれたという。一方父親は、積極的に周囲のために活動する人で、大量のカボチャを食料にするだけでなく、種子から苗を作り販売するビジネスを、周囲を巻き込んで始めるなど、目の前にあるものを使って地域を豊かにする大切さを教えてくれたという。

そのような教育を受けてきた青森さんは、中学卒業後、人のために働きたいと看護師を志ざし、地元の病院で看護師見習いをしながら苦労して通信高校を卒業した。その後上京し、入学した順天堂看護学院では「見返りを求めない奉仕と博愛の精神」を学んだと言う。この精神は東京における15年にわたる看護師生活で生かされ、来院する病气への不安を抱えた患者やその家族にどのようなケアをすれば「あなたがいてくれてよかった」という安心感を与えるのか、常に考えて行動する原点になったそうだ。

その後は、松崎に帰り22年間民宿を経営することになる。民宿には性別、年代から宿泊目的まで様々な人々が宿泊する。そのような中で相手の意向に寄り添い、ちょうどよいおもてなしができなければ、再訪は期待できない。実際、青森さんは宿泊者に関する日記を欠かさず付け、「今年もよくいらっしやい

ましたね」、「去年より大きくなったね」と声をかけることを怠らなかったという。

いずれの経験も大変な苦労を伴うもので楽しい事ばかりではなかったはずである。しかし、青森さんは「このような経験があったから今の私があるの」といかにも満足そうに話し、経験を惜しみなく活動に生かしている。コロナ禍を乗り越えて蔵らが存続できたのは、平等な立場でありながらも、時に先頭に立ってメンバーを引っ張りかつ、妬まれることなく信頼されなければならない、難しい立場を要求されるワーカーズコレクティブにおけるリーダーたりうる青森さんがいたことも大きい。

6. ～おわりに～ 居場所作りに重要なこと

一般的に居場所とは、店舗のような物理的な空間と、活動に参加する人々が「そこで共に活動し続けたい」と感じる心理的居場所との二つの要因が共存すると言われる(石本 2009)。蔵らはコロナ禍により図らずも物理的居場所となる店舗の閉鎖を強いられたが、活動する人々の居場所であり続けた。そこで見てきたのが蔵らに存在していた強固な「心理的居場所」としての機能である。これは、決して自然に獲得できたわけでも、青森さんの個人的な経験のみで達成できたわけでもない。きっかけは確かに青森さんが子どもの時から漸次確立してきたパーソナリティにあるのかもしれない。しかし、コアメンバーをはじめ、青森さんの周りに集う協力者との協働が無ければ蔵らの居場所としての機能は維持できなかったものと考えられる。蔵らで活動を行う人々は、「ここにいたい、受け入れられている」という安心感にも増して、「自分の得意を生かして活動している」という自らが社会的な役割を果たしているという充実感を得ていた。中村(2020)は、心理的居場所感とは個人的に安心できる安息的居場所感と、社会的に認められていると感じる役割的居場所感に分けられ、安息的居場所感とは獲得されやすい一方で、役割的居場所感とは獲得されにくく、その獲得は居場所づくりに関する今後の課題であるとしている。

蔵らは各自の役割を明確にすべく、①関わる人み

んなが共有可能なわかりやすい共通の目標を設定し、②リーダーとなりうる人々が全てのメンバーにきめ細かい声掛けを行い、③現在の各自の環境でできる最高の事を楽しくやり、将来に向け準備をすることをコロナ禍以前より徹底し、コロナ禍においてはさらなる補強をしていた。ただし、決して各自の意に反して成果のみを求めるのではなく、「他人の思いに寄り添う」ことを大前提として無理のない頑張りを促していた。

もう一つ、コロナ禍における居場所の維持に大きな役割を果たしたのはワーカーズコレクティブという運営方式である。蔵らでの労働の担い手は年金受給層であるとの限定は付くものの、本方式は家賃、人件費等ランニングコストの心配をすることなく、労働者らの状況に応じた迅速かつ主体的な意思決定を可能としていた。折しも2022年10月1日に労働者協同組合法が新たに施行され（厚生労働省2022）、地域に密着し、行政と密接に連携を取りながら、自らの生活の質の向上を目指して社会的な課題を解決する団体の組織化が促進されるものと考えられる。蔵らが先駆けて示した居場所の運営モデルはコロナ禍等の社会環境の激変にも耐性を持つことが明らかになったことから、回復の兆しが見え始めた現在、早くも松崎町等の地域行政から疲弊した地域経済の回復、地域経済を担う高齢者の関連活動への参加の両面で大きな期待がかけられている。ワーカーズコレクティブという働き方を通して安息的居場所感と役割的居場所感を併存させ、心理的居場所として機能し続けてきた蔵らの存在は稀有であり、ポストコロナの居場所作りに際して大いに参考となる事例であろう。

【謝辞】本研究は、令和3年度静岡大学地域連携応援プロジェクトの助成を用いて実施した。

——— 参考文献 ———

- 石本雄真 (2009) 「居場所概念の普及およびその研究課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』3巻, pp.93-100.
- 伊藤江里・松本和浩 (2021) 「食を通じた居場所作りがもたらす変化と課題—大井川鐵道抜里駅「サヨばあちゃんの休憩所」を事例に—」『日本地域政策学会』26巻, pp.66-73.
- 尾澤 俊・藤井さやか (2021) 「私有空間を利用した住民運営型の高齢者交流拠点づくり促進策の成果と課題-地方小都市での取り組みに着目して-」『都市計画論文集』56巻, 3号, pp.1253-1260.
- 河西邦人 (2010) 「ワーカーズ・コレクティブによるコミュニティ・ビジネスの事例研究」『札幌学院大学経営論集』2巻, pp.1-17.
- 厚生労働省 (2019) 「これからの地域づくり戦略」1.0版 <https://www.pt-ot-st.net/contents4/nursing-care-30/wp-content/uploads/sites/3/2019/04/000490107.pdf> (2022年6月14日取得)
- 厚生労働省 (2021a) 「令和2年簡易生命表の概況」 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life20/dl/life18-15.pdf> (2022年6月14日取得)
- 厚生労働省 (2021b) 「令和3年版高齢社会白書」 https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/03pdf_index.html (2022年6月14日取得)
- 厚生労働省 (2022) 「労働者協同組合法」 <https://www.mhlw.go.jp/content/11909000/000995367.pdf> (2022年10月27日取得)
- 坂本明日香 (2021) 「新型コロナウイルス感染症禍の外食産業の動向」『マンスリー・トピックス』061号 https://www5.cao.go.jp/keizai3/monthly_topics/2021/0430/topics_061.pdf (2022年6月14日取得)
- 静岡県 (2015) 「コミュニティビジネス事例集『企業組合であい村蔵ら』」 http://www.pref.shizuoka.jp/sangyou/sa-510/cb/jirei2014_kurara3.html (2022年6月14日取得)
- 静岡県 (2022) 「令和4年度静岡県高齢者福祉行政の基礎調査 高齢化率の公表」 <http://www.pref.shizuoka.jp/kousei/ko-210/chouju/keikaku/kisochosa/documents/r4koureikaritu.pdf> (2022年6月14日取得)
- 中島喜代子・廣出 円・小長井明美 (2007) 「「居場所」概念の検討」『三重大学教育学部研究紀要』58巻, pp.77-97.
- 中村美智代 (2018) 「入所施設を利用する高齢者の「居場所感」に関する予備的検討」『甲子園短期大学紀要』36巻, pp.17-25.
- 中村美智代 (2020) 「構成要素からみた通所サービス利用高齢者の居場所感の様相に関する検討—獲得されやすい居場所感と獲得されにくい居場所感に着目して—」『人間関係学研究』25巻1号, pp.33-42.
- 西中華子 (2014) 「居場所づくりの現状と課題」『神戸大学発達・臨床心理学研究』13巻, pp.7-20.